

川嶋昭二：外国産コンブ目植物の漂着記録（6）

ゴヘイコンブについて

Shoji Kawashima: Drifting records of alien species of the Laminariales (6).

*Laminaria yezoensis* Miyabe

*Key Index Words:* drifting record—Kombu stick—*Laminaria yezoensis*—Phaeophyta—seaweeds.  
Shoji Kawashima, Hiyoshicho 4-29-15, Hakodate, Hokkaido, 041 Japan

(7) *Laminaria yezoensis* Miyabe ゴヘイコンブ

ゴヘイコンブは北海道釧路市から根室市ノサップ岬を経て、歯舞諸島、千島列島、アリューシャン列島、アラスカおよびカナダのバンクーバー・アイランドの北端に位置するホープ・アイランドまでの北太平洋一帯に広く分布し、掌状葉ならびに盤状根を持つことを大きな特徴としている（宮部1902, Druehl 1966）。また、本種は多年生であるが、正確な寿命はまだ不明である。

北海道沿岸では場所によって漸深帯上部に小さな群れをなして生えることもあるが、主な生育帯は水深3-10 mほどの深いところである。葉体の大きさは一般に30-100 cm、時には150 cmに達するが、茎の長さは5-10 cmから稀に15 cmくらいにしかならず、直径も0.7-1.2 cmくらいが普通である。

ところで、宮部（1902）は本種の茎の長さは年令に応じて変わり、その最長なものは2尺6寸（約80 cm）、また直径はおよそ8-9分（約2.5-2.7 cm）になると記載している。しかし、このような長く、かつ太い茎を持つものは同報文の第13図に示されているエトロフ島産の葉体のように、千島列島からしか知られておらず、Nagai（1940）は茎長145 cm、基部の直径は3.5 cmに達すると記載している。ちなみに、Druehl（1966）によればアリューシャン列島からカナダにかけては茎長40 cmになるものがあるという。

このように北海道とそれ以外の北太平洋地域で本種の茎長やその直径が著しく異なるのは生育環境の違いによるものか、あるいは寿命の差なのか分らないけれども、とにかく数10 cmあるいは100 cmをはるかに越えるような長い茎を持ったゴヘイコンブが漂着すれば、それは北海道産のものでないことはほとんど間違いないといえる。

1981年7月に北海道の太平洋沿岸2か所からこのようなゴヘイコンブの漂着物が相次いで発見された。最

初の発見は7月4日のことで、釧路支庁管内浜中町藻散布（もちりっぷ）の海浜で住民に拾われ、北海道立釧路水産試験場に保存されている。また、第二の発見



Fig. 1. *Laminaria yezoensis* Miyabe. A pair of fronds, having a large scutate disc jointly, cast ashore at Mochirippu, Hamanaka, on the Pacific coast of eastern Hokkaido on July 4, 1981. The left-hand frond: 125 cm in stipe length and 275 cm in total. The right-hand frond: 135 cm in length of stipe only. On the stipe eleven young fronds of *Alaria fistulosa* Postele et Ruprecht are attached.



Fig. 2. Details of the basal portion of the fronds shown in Fig. 1. Scale bar, 10 cm.

はそれからわずか9日後の7月13日、渡島支庁管内南茅町町木直(きなおし)沖の定置網に掛かったもので、同町の地場産業振興センター内に展示されている。

浜中町藻散布への漂着葉体は大きな盤状根から2本の茎が出て、その一方は掌状葉を持つほとんど完全なものであるが、他方は茎しか残っていない。ただ、その先端の近くにはオニワカメ *Alaria fistulosa* の根の一塊が着生し、そこから14本の中肋だけとなった若い葉体が出ている (Fig. 1)。

盤状根は恐らく2つのものが融合したものであろうが、全く一体をなして長径18 cm、短径12 cmのほぼ楕円状を呈し、中央部は少し盛り上がって厚さ2 cmほど、また縁部は凹凸をなしているが基質から剥れたときの損傷などは全く見られない。表面全体には細かいしわが多数見られる (Fig. 2)。

2本の茎は盤状根の中央部から相接するように出て、いずれも基部は円柱状を呈し、上の方に次第に細く、かつ扁円となる。掌状葉を持つ方の茎は長さ125 cm、基部の直径6.4 cmあり、茎だけの方は同じく135 cmおよび8.3 cmもある。表面は平滑で硬く、弾力性に富み、植物体というよりもむしろ藪し皮のような質感がある。

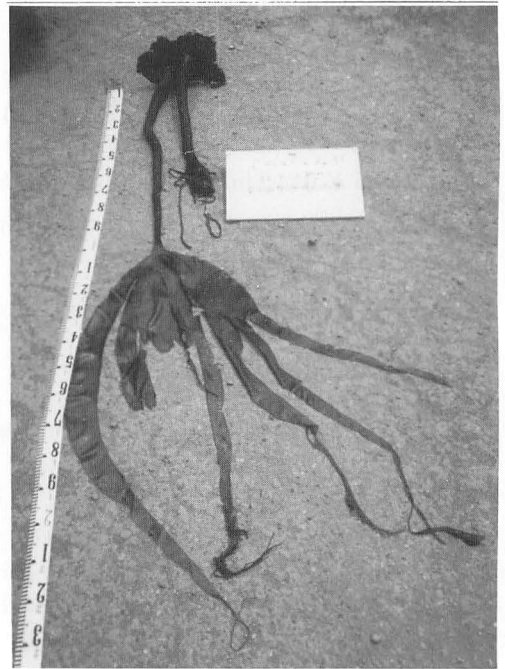


Fig. 3. *Laminaria yezoensis* Miyabe. Driftage caught in set net at Kinaoshi, Minamikayabe, on the Pacific coast of southwestern Hokkaido on July 13, 1981. The size and condition of the fronds fairly resemble those drifted to Mochirippu (Fig. 1).

掌状葉は基部が広くさび状で11枚の葉片に深く切れ込み、その多くは途中から切れているが、先端まで残っている2枚は150 cmの長さがある。また、各葉片の幅は8-12 cmある。葉質は柔らかい。

次に、南茅町町木直への漂着物も盤状根から2本の葉体が出て、その一方にはほぼ完全な掌状葉があり、他方は茎のみでその先に数本の中肋だけの小さいオニワカメが着生していて、偶然とは言え藻散布への漂着物の状態に非常に良く似ているのには驚かされる (Fig. 3)。この標本については生時の計測データは無いが、ここに掲げた写真からも分かるように盤状根は非常に大きく、掌状葉を持つ葉体は全長270 cm前後、茎長も120 cmはあると思われるほど大きなものである。

ここに紹介した2地点への漂着ゴヘイコンブは、その発見日や葉体の大きさなどから、恐らくエトロフ島からウルップ島あたりの同じ生育地から同時に漂流し始め、オホーツク海からこれらの島の間を抜けて北海道の太平洋沿岸を流れる道東沿岸流(小笠原 1985)によって運ばれてきたものと推測される。1981年は冬以来初秋に至るまで親潮系水の勢力が異常に強く、根



Fig. 4. A Kombu stick, 85 cm in total length, made of the stipe of *Laminaria yezoensis* Miyabe cast ashore at Mochirippu, Hamanaka, more than sixty-five years ago. The stick is reinforced by piercing an iron pole through the whole length of the stipe. Preserved in The Kushiro City Museum.

室から函館に至る太平洋沿岸各地の旬別平均水温は親潮の勢力が最も強くなる5月から7月にかけて平年より1-4°Cも低かった(北海道栽培漁業振興公社1982)。このようなこの年の異常な寒流の勢力もまた漂着物の運搬に大きく作用したものとと言えるだろう。

浜中町から南茅部町までの漂流経路も推測の域を出ないが、南茅部町に漂着した葉体が仮に浜中町の沖合10ないし15海里のあたりを通過し、そのまま沿岸と平行に9日間で運ばれてきたものとすれば、その間の距離は約215海里となるので、1日あたりの漂流距離は24海里、すなわち1海里/時の速度と推算される。

今日まで、このような長い茎を持ったゴヘイコンブの漂着に関する正確な記録はない。ただ、著者はかつて釧路市立郷土博物館(現釧路市立博物館)所蔵の「昆布杖」(Fig. 4)の鑑定を依頼されてその由来を調べ、それが漂着ゴヘイコンブで製作されたものであることを報告している(川嶋1970)。ここに、この珍しい昆布杖について簡単に再録しておく。

この昆布杖は、かつて浜中町藻散布に在住した故片桐才記氏が同地に漂着したゴヘイコンブの茎を利用して製作したものである。漂着年は不明であるが、後年この杖を譲り受けた浜中町の坂野貞蔵氏の証言によれば、片桐氏がこれを持っていることを初めて知ったのは大正15年(1926)のことであったというから、少なくとも今から65年以上も前のことになる。

杖は全長85 cmあるが、実際のコンブの部分は73.5 cmで、その中心を貫通する鉄棒(直径5.3 mm)が先端に11 cmほど突き出し、こうもりがさの石突きらしい金具が付いている。杖の上端は盤状根を整形して作った扁平な握り部分となっていて、それより先端

にかけての茎の部分は緩やかに曲がりくねり、乾燥のために変形しているが次第に細くなっている。質は非常に硬く、濃褐色で光沢がある。製作にあたって、漂着コンブが生のうちその茎に鉄棒を通し、川水に晒してから時間をかけて乾燥したものであると言う。

宮部(1902)も本種の茎で烟管を作るものがあると記している。著者もまた、根室地方で漂着したコンブで杖を作り所持している人の情報を得たことがあるが、恐らくこれもゴヘイコンブであろう。ただ、その詳細は残念ながら不明のままである。

浜中町に漂着した標本の調査には高杉新弥氏、佐々木茂氏の協力を得た。南茅部町に漂着した時の葉体の写真は四ツ屋義則氏から提供を受けた。また、昆布杖の再録については釧路市立博物館澤四郎館長のご好意を戴いた。これらの方がたに厚く御礼申し上げる。

## 文 献

- Druehl, L. D. 1966. Taxonomy and distribution of northeast Pacific species of *Laminaria*. Can. J. Bot. 46: 539-547.
- 北海道栽培漁業振興公社 1982. 養殖漁場海況観測取まとめ(第11号): 1-145.
- 川嶋昭二 1970. 昆布杖について. 釧路市立郷土博物館館報(202): 11-13.
- 宮部金吾 1902. 昆布科. p. 1-60. 北海道水産調査報告, 卷之三, 昆布採取業. 北海道殖民部水産課.
- Nagai, M. 1940. Marine algae of the Kurile Islands I. J. Fac. Agr., Hokkaido Imp. Univ. 46(1): 1-137.
- 小笠原淳六 1985. 北海道近海の海洋構造について. p. 2-8. 育てる漁業(150). 北海道栽培漁業振興公社.

(041 函館市日吉町4丁目29-15)

